

Title	書評：津田正太郎著『ネットはなぜいつも揉めているのか』ちくまプリマー新書、2024年
Sub Title	
Author	平井, 智尚(Hirai, Tomohisa)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2025
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.30 (2025. 7) ,p.102- 104
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20250701-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

津田正太郎著『ネットはなぜいつも揉めているのか』

ちくまプリマー新書、2024年

平井 智尚

書評の依頼を二つ返事で引き受けたが、評者にとって本書の書評は荷が重い。評者はインターネットに見られる文化現象を主たる研究対象としている。しかし、評者は「SNSはやっていない」。本書で扱われている「ソーシャルメディア」、その主たる対象である「Twitter (現X)」についても、サービス開始当初から現在に至るまで、さして興味がない。さらには、本書が取り上げている政治や社会の争点に対する関心は乏しく、著者の専門領域の一つであり、本書の土台である政治コミュニケーションも耳学問の域にも至らない。それゆえ本評は専門家の書評には及ばない。ただし、「プリマー＝入門書」と位置づけられる本書の読者という点で評者は適格かもしれない。もし本評が単なる「お気持ち表明」に過ぎないと映るとすれば評者の見識の狭さによるところでありご容赦願いたい。

本書は入門書としては難易度が高い。それは本書の専門性の高さや充実度に由来する。第一に、ソーシャルメディアを表現の自由、公共性、権力、民主主義といった社会科学の根幹をなすテーマと接続し、事例を交えながら論じる著者のさばきは巧みである。第二に、本書は日本語文献にとどまらず、海外における最新の研究も取り入れ、政治的分断や陰謀論に関する諸外国の状況や事例にも言及しながら議論が展開されている。本書ほどの参考文献・資料が扱われている新書は類を見ないだろう。第三に、ソーシャルメディアの情報環境を説明する概念の危うさに関する指摘は示唆的である。エコーチェンバーやフィルターバブルといった概念は的を射ている感を受けるが、本書でも論じられているとおりそれらは十分な実証性が担保されているとは言い難い。エコーチェンバーやフィルターバブルといった概念の乱雑な使用が誤認を招き、結果として分断や分極化が過度に強調される懸念を考えると「緩やかなエコーチェンバーの崩壊」といった本書の指摘は社会的にも意義がある。

そして専門性の高さや充実度は時流への踏ん張りをきかせている。あとがきを見る限り本書は2024年3月に脱稿したと推察されるが、以降の日本社会で大きな関心を集めた政治や社会の争点は本書を手引きとすることで解像度が上がる。2024年の東京都知事選挙や兵庫県知事選挙において選挙戦当初は有力と見なされていなかった候補者の台頭やその文脈で見受けられた「オールドメディア」批判は、「不寛容な寛容社会」とマスメディア批判（第四章）や「単純な複雑さのせめぎ合い」（第六章）の内容をもって読み解くことができる。また、2024年末から2025年初めにかけて大きな関心を集めた「フジテレビ問題」についても、マスメディア批判はもちろんのこと、性被害を受けたと推定される人物のSNSのコメント欄に書き込まれたバッシングや誹謗中傷は第三章で扱われている「非難される被害者」の問題と通じている。インターネットにかかわる現象を扱った社会科学の議論の多くは公になっ

た時点で賞味期限が切れている。本書も事例、そしてXというサービス自体も賞味期限切れの感がある。しかし、本書の内容は事例やサービスを置換しても新鮮に味わうことができる。それはひとえに著者の綿密かつ丁寧な作業によるものであり、科学的な抽象化の意義を改めて実感することができる。

しかし、本書を通貫する軸がつかみづらい点は気にかかる。本書と領域的に近い書籍として『炎上社会を考える』（伊藤昌亮、2022、中公新書ラクレ）が挙げられる。同書は冒頭で「新自由主義」の観点から炎上社会を読み解くと述べられており、その軸に沿って読むことで多様かつ専門性の高いテーマも把握しやすくなっている。本書の軸は表題の「揉めている（対立）」と推察されるが、表現の自由、公共性、権力、民主主義といった重厚なテーマ、ならびに方々で言及される専門的論考を貫く強度が「揉めている（対立）」では十分にまかなえないように感じる。それゆえ、読者は重厚なテーマや専門的論考に足を取られてしまい、難易度の高さを覚えるのではないかと推察される。あわせて著者の気遣いがうかがえる事例の紹介も、例えば「私の炎上体験」（第一章）などは、ともすれば「言い訳」や「自分語り」と誤解され、本筋を覆い隠してしまう。こうした憂いは本書が入門書であること、ならびに著者の知識量や思いやりによるものであり瑕疵ではない。ただ、気配りと欲張りが同居している感は受ける。

本誌の書評は時に学術誌の査読コメントとリプライのような応酬が展開されることもある。しかし本書は入門書であり、著者の専門領域について評者は浅学非才であるため査読コメントのような指摘はできない。そこで「クソリプ」扱いを受けるかもしれないが、評者の個人的な関心に即して本書と関連するいくつかの論点を書き留める。

第一に、資本主義の問題である。大多数のソーシャルメディアは私企業によって運営されており、ユーザーのやりとりも私企業が提供するサービスの域内（＝プラットフォーム）で展開される。かなり極端に言えば、サービスを提供する事業者が本書で扱われている諸問題の改善に取り組む道義的責任はない。むしろユーザーのアクセスや関心が高まる対立や憎悪は事業者の利益につながるという点で「望ましい」状態である。このことは「アテンションへの注目」（第二章）など方々で触れている。しかし、全体としては資本主義への言及を慎重に避けているように見える。ソーシャルメディアの制度的な問題点を指摘する必要はなくとも、対立が発生・加熱する理由として制度や仕組みは無視できない側面であると考えられる。

第二に、本書の読者として期待される「若者」との関係である。若者たちは「SNSはやっていない」とよく口にする。この発言は、不特定の他者に閲覧されるような投稿は行っていないことを意味する。若者は日常的にSNSを利用しているが、その大半は非公開設定（鍵垢）を通じた身近な知人とのやりとりにとどまり、そこに本書で言うところの「公共性」（第一章、第二章）は認められない。本書で扱われているSNSの多くは「おじさん」の世界である。中高年男性が気持ち悪いであるとか老害であるなどと言いたいわけではない。ただ、知り合い同士の閉じた圏域で画像や映像を中心としたSNSに慣れ親しんでいる者たちに本書の内容はすんなりとは刺さらない。若者に限らず、本書で扱っている対象とは異なる「SNSをやっている」人たちは本書とどのように接するべきなのか見解を伺いたい。

第三に、ソーシャルメディア内の「権力」の問題である。「私の炎上体験」のきっかけとなった投稿は「パブリックエネミー」として糾弾されるような内容ではない。しかし、炎上へと発展したことは不思議ではない。「私の炎上体験」は標準的な炎上事例である。著者のXのアカウント名は実名で

あり、プロフィールページのリンクやヘッダー画像を見れば即座に個人を特定できる。第二章の90ページで述べられているように、大学教員は言論活動にかかわる資源を有しておりソーシャルメディア内で「権力」と見なされる場合もある。このことをXで約1万4,000のフォロワーを抱える著者は誰よりも強く認識しているはずである。象徴資本を蓄積する者が公共性を帯びた領域で発言している以上、いくら「個人の感想」と弁解してもそれは権力の行使と受け取られかねない。本書を講読した大学生は冗談交じりに「著者はこの本を通じてひたすら言い訳をしている」と感想を述べていた。それはまさしく著者の有する権力性の核心を突いた発言に思える。この点は人文・社会科学における研究者の立ち位置や研究対象との距離感という重要な問題ともつながるが、ここでは割合と素朴に著者が自身のソーシャルメディアとのかかわりについてどのように考えているのか聞いてみたい。

冒頭にも述べたように評者は政治や社会の争点にはほとんど関心がない。それゆえ著者のソーシャルメディアの投稿やリポストの多くは目に留まらない。ただ、それらと混在するドジっ子エピソードや甘いものを食べて幸せな気分になったという投稿は著者の人柄がにじみ出ているのが和む。そうした心温かいソーシャルメディア生活を著者が送っていることも本書の読者には知ってもらいたい。

(ひらい ともひさ 日本大学法学部)